第四章　古代の福生

一　大塚や瀬戸岡古墳と福生

対岸の秋多町には、大塚とか瀬戸岡古墳とか呼ぶ高く土を盛ったところがある。それらはいずれも古墳であって、都の旧跡に指定されている。古墳というのはその地方を支配していた豪族の墓であって、日本の各地には現在大小さまざまな形の古墳が見られる。このような豪族の大きな墓の作られた時代を文化史的時代区分の上から、古墳文化時代といい弥生式文化の次の時代に当る。この時代は大体日本の国が統一される前後ではなかったかと推定され、三世紀から七世紀頃までを古墳時代とみるが、この近在では八世紀に至ってもまだその風習が残っていたといわれている。

大塚古墳は「二宮から西方一キロの台地上東秋留の字大塚の畑中に一大円墳が立っており、高さ十五尺で、頂上には宮祠がある。裾まわりが耕作のため相当削られたが、西多摩郡内では最大の円墳で今から千五百年前、古墳時代中期のもので、この地方における有力者の墳墓と考えられる。」（稲村坦元・豊島寛彰・東京の史蹟と文化財）また、瀬戸岡古墳群は「地下拡式で地上の墳丘が極めて小さく、地下の石室内には火骨を焼いて陶壺に収めてあり、今から千二百年前奈良期に入って仏教の伝来により火葬が行われ始めたが、尚往昔の石室古墳の風習があるので、その両者が並び行われた過渡期のもので珍らしいものである。」（右　同　書）

福生の場合は「三多摩民俗調査」の報告によると、かつて志茂の清水吉右衛門宅附近に首塚とよぶ塚があったそう

だが、区劃整理に際し、発掘してみたところ出土品は何もなかったとのこと、その他にも塚らしきものもあったが、それらはいずれも玉川上水の工事による盛土ではなかったかとみられている。

とにかく、現在福生町内には古墳らしきものは皆目見当らない。おそらく古墳はなかったものと推定される。すなわち前述の大塚は「山継一族の古墳であろうといわれている」（朝日新聞社・東京むかしむかし）ことから判断して、この山継という豪族が、農耕生活に依存していた時代として最も地理的に恵まれていた、秋留台地を中心に附近一帯のこの地方を支配していて、福生もその支配下におかれていたのではないかと考えられる。

二　福生という地名

○そ　の　一

吉田東伍著「大日本地名辞書」によると「福生フッサ、生字をサの音に仮れること其の故を詳にせず。此村及熊川村は近世拝島領の中なりき。」とある。

たしかに「福生」と書いて「フッサ」と読める人もあまりないし、「フッサ」といわれて「福生」の文字を思い浮かべられる人は近郷の人か、特殊な関係を持った人でなければちょっとないのではないかと思う。その語源は果してどこから来たものであろうか、まことに興味深いものである。

そこで藤原音松著「武蔵野史」の「有史時代の武蔵野、（五）武蔵国名の起源」より引用させていただくと、

「……如上の城砦起源説に対して武蔵産物に由来するいわば生産物名説がある。

国学者賀茂真淵翁は、相模・武蔵の地を共に考えて、相模・武蔵の地はもと无邪国ムザノクニと言ったので、それを无邪上ムザガミ、无邪下ムザシモに分ち无邪上国の「ム」が落ちて相模サガミとなり无邪下国の「モ」が落ちて

无邪志ムサシとなったと解している。

松岡静雄氏は「ム」は「実」、「サ」は「麻」、「シ」は「道」、「チ」の転と解し「ムサ」は「実麻」の謂で日本語では「ムシ」と称え「ムシ衣」「ムシ衾」の如く用い、今も「カラムシ苧麻」という。

アイヌ語の「ムセ」「モサ」（蕁麻）も同源で、朝鮮語では「苧布」を「モシ」と称える。「フサ圃麻」を産する地方が「総の国」と呼ばれたように「ムサ」を産する地方が「ムサチ」と呼ばれ、「チ」が「シ」に訛って「ムサシ」と呼ばれるであろう。要するに「无邪志」は「馬城」の転音と言われる説と、土産の「麻」からきた地名という説があるが、更に言語学的・民族学的解釈がある。……」

また、「同書、（八）麻」の項に

「内蔵式によれば麻子二石の内六斗を当国が供進している。江戸の「麻布アザブ」は古くは「麻生」とも書き「麻」を多く生じたので地名とした。橘樹郡にも「麻生村」があり、又「阿佐ケ谷　アサガヤ」も同様の起源を有するであろう。」

というわけである。

更に、五日市町伊奈の岩走神社、宮沢宮司所蔵の「安通万歳記」（宝暦八年―天保六年）に

「文政二年十一月二十四日天気吉、清左衛門四女お今事、房村、村野弥十郎方へ嫁ス、媒シテ同道ス。」

とあり、また、福生村の「寛文十二年子六月苗検地帳書載写第四号」の字名に「中房」とも見えている。

すなわち、「福生村」を「房村」と書いたり、「中福生」を「中房」と書いたことがあるということから、「フッサ」については幾つかの当て字があること、その元は「フサ」であろうということ、更に「フサ」は「麻」ではなかろうかとの考えから、前出の生産物名説から「福生（フッサ）」を解明してみようと試みたわけである。

さて、その「フサ」を辞書で調べ、その中で主なものをあげると、

一、総（フサ）（ふさふさしたる意）

麻の古語、古語拾遺「麻所生故謂之総国」注「古語麻謂之総也」（大槻文彦著・大言海）

一、総、房（フサ）

麻の古名（大麻）（上田万年、簡野道明著、大日本国語辞典）

ということで「フサ」とは「麻」のことである。

次にこの「麻」であるが、「国郡沿革考」に「上古天富命沃壤ヲ東土ニ求メテ麻穀ヲ播殖ス因リテ総国トイフ。孝徳天皇大化改新ノ時分チテ上総、下総二国トナス。」とあり、「和名抄」に「上総（加三豆不佐）、下総（之毛豆不佐）」とあって古の総の国の属地であるということから、現在の千葉県・茨城県は上古においては「麻」の栽培がきわめて盛んに行われたことが信じられるわけである。

因みに「穀」は「ユフノキ」であって「木綿」である。この「木綿」は後世「結城国」といわれて現在の茨城県結城市を中心とした地方一帯に栽培されたといわれる。なお、「地理志料」と「匝瑳（サフサ）、迺匝上通下正、当読云佐布佐、安房斎部本系帳、美麻所生狭布佐郡、即修真麻也」とあるが、これは現在の千葉県匝瑳郡であって、すばらしい麻が穫れたことを物語っている。また、「布佐郡（フサ）」は現在の東葛飾郡布佐町を中心としたことは「和名抄」にも明らかである。

さて次に前出地名辞書に「武蔵国比企郡高生ダケフ、高生とは竹原の義にや、古姓に建部・武生あり。」とあることや、「麻生菅アソフ」「菅生スガフ」等があることから、「福生フッサ」は「総生フサフ」であって、「総即ち麻の原、麻が広々とした原野に栽培されている所である。」という意味に考えられるのである。

すなわち「竹原→竹生」であり「麻原→麻生」であり「総原→総生→福生」（福生については後記）であると考えたのである。

次に、平凡社刊「世界百科大事典」によって、麻の栽培の適地としての条件をあげてみると、

(1) 温度の急変なく生育期間中かなりの降雨があり空気湿度の高い地。

(2) 強風のない地。

(3) 生育の後期から収穫期にかけて晴天の多いこと。

(4) 砂質よりも有機質に富んだ排水のよい壌土ないし極壌土。

(5) 収穫後、茎は浸水精練されなければならないので、水が豊富で便利な地。

等であるが、これらの点からしても前に記したように武蔵一帯にも「麻」の栽培が広く行われたことはうなずけるのである。

青梅市に「調布」があり、東京都下にも「調布市」があることや、万葉集巻十四にも、

多摩川に晒す調布（てつくり）さらさらに　何ぞこの児のここだかなしき

と載せられており、麻からつくられた貢物の手織布が満々たる多摩川の清水に晒された美しい光景が目に浮ぶようである。

さて、これらの点からしても、中世以降室町末期から、軽くて暖かであること、つむぎ易く収量も多いこと等から、木綿が麻布の用途をおびやかし、これの栽培が麻にとって代るまで、「福生」を含めた多摩川の沿岸各地に麻がつくられ、特に数多くの湧水を持ち、しかも多摩川を控えた福生村では、麻が相当に栽培されたと想像できるわけである。

言語音韻学の方からは、「総生フサウ Fusau のウ u が脱落し、フサ Fusa（総、房）となり、それに s が添加されてフッサ Fussa になったことは許されてよいものと思われる。

以上によって、「フッサ村」は本来「総生村」（フサウムラ）でありそれが、「総村」（フサムラ）・「房村」（フサムラ）となり、転訛を繰りかえして「フッサムラ」となり、後世、意字である漢字の中から「福」を「生む」という文字を故事つけて、現在の「福生」になったのであると考えられるのである。

○　そ　の　二

福生の地名について、前項同様、「布佐村」のフサに関係があると考えられるが、フサは、前に掲げた麻ではなく地形的景観語であると論ずる人がいる（藤井尚治氏説）。藤井氏はフサについて、アイヌ語フッチャの転訛したものと推考している。藤井氏によれば、アイヌ人は、湖口を「フチ」といい、片ほとりを「チャ」と発音するので、かつて、東日本に住居していたと考えられるアイヌ人が、湖のほとりにつけた「フッチャ」が、後世フッサに転訛し、更にフサと呼ばれるようになったというのである。しからば、もとフッチャであるべき布佐村は、果して、フッチャ（湖口のほとり）であったろうか。布佐村は千葉県手賀沼の東にあるので一応フッチャに該当するが、上古フサの国と言われていた千葉・茨城県はどうであろうか。フサの国が、後年、「上総（加三豆不佐）、下総（之毛豆不佐）」（和名抄）に分れたことは、前述の通りである。フサの国は、東京湾を湖と考えるとき、湖に臨んだ地となり、やはり、フッチャに該当するのである。このように考えるとき、フッチャ→フッサ→フサの転訛は、アイヌ語の地形的景観語であることが推察できるのである。福生町も縄文文化期のころにおいては、東京湾が深く喰い入っていたので、ここに住んだアイヌ人が湖口のほとり（フッチャ）と呼び、それが、後世フッサになり、意字に「福生」を選んだものであると考えられる。

○　そ　の　三

しかし、同じアイヌ語源説でも、次に掲げる説は、その趣きを異にしている。すなわち、

「福生の名の語源は、ブッセではないかと考える。ブッセは湧水というほどの意味である。神明社の社前には、湧き出てつきぬ泉がある。清厳院の境内にも清水の湧き出る所がある。これから察するに、福生の語源は、ブッセでなければならない。」（並木嶋雄氏談）

ブッセ（湧水）については、右に説くほかにも、まだある。水クボ、サカサ川などは、上水の影響もあろう。加美の伊藤儀平氏の所を出口（デグチ）というが、今でも少し雨が降ると水が出る（昭和十九年の話）。出口は「自分の子供の頃は鯉を飼っていた」（横田寿照氏談）ともあったくらいである。

原ケ谷戸の工場辺は、イケッバタといい、大水が出た後は、長く水が出ていたといわれる神明社の北側にも、イケッバタという水溜があったという。古い家の名にも、池端・ヒカ三井戸・イケ久保・出本（イデモト）・池の上（田本）・池尻など、水に関係あるものが多くある。このことからも、福生は湧水に縁があることは考えられる。

○　そ　の　四

「アイヌ民族の中では『フッサ』という言葉には二つの意味があり、一つは木の梢、すなわち木の幹や枝の先端ということと、もう一つは清い泉を常緑樹の葉につけて病にかかった人とか、傷つきたおれた人に清い泉をふりかけると、そのたおれた人が蘇生するということだそうである。」（小林幸作氏・アイヌ酋長見聞談）

福生の土地が湧水に富んだ場所であったということは、前述の通りで、アイヌ語から起った『フッサ』説と結びつくのである。

さて、それでは福生の近辺にアイヌが住んでいたであろうか。これについては諸種の学説から考えてみても、ある

いは近くの例を上げれば秋多町などにもアイヌ語にちなんだ地名がある（山下茂樹・多西村に於ける沿革と史蹟）ことからして、アイヌの住んでいたことを推測することができる。

次に、わが国では古来身のけがれを払い清める宗教的儀式があり「ハライ」と呼んでいる。このみそぎということは、水を浴びて身体の汚穢を洗い清めることで、この思想は日本だけでなく西洋・東洋を通じてあったものと考えられる。

上代人のけがれをはらうこの思想は、死の外に疾病・負傷・出産等を始め、思いがけない災害等を含めて一切のけがれをきよめるということが、宗教精神の根本であったようである。こうした意味に関係ずけられる福生であればその意義は大である。

一方、檜原村に払沢の滝というのがあるが、これは「ふっさわ」と読む。この「ふっさわ」は「ふっさ」と何か関係があるのではないか（並木嶋雄氏談）ともいわれている。

では、どうして「ふっさ」が福生になったか、これについては「生の字ほどいろいろの読み方のできる字は少い。仏教の世界では生の字を『さん』と読むことが多い。これがつまって『ふっさ』になったのではないだろうか」（榎本収宗氏談）といわれる。

これからして、中世または近世に秀れた和尚がいて「ふっさ」によってこそ幸福が生まれるのだというようなことから福生という字をあてたのではないかと考えられる。

○　そ　の　五

昭和二十年七月、福生に仮住居していた三重県の倉本為一郎氏は福生の地名について次のような説を述べている。

福生と書いてフッサと発音するが、フサから出た語であると思う。私（倉本氏）ども関西人からみると、関東人と言

ってよいか、この辺の人と言ってよいか、東京附近の人は言葉の間に「ツ」という音をはさむことが多い。例えば次の如くである。（上段関西地方の言葉で、下段括弧内は東京附近の言葉である。）

池の端（イケッバタ）　追ってしまえ（追ッチマエ）　落ちる（オッコチル）　歩いて（アルッテ）　根（ネッコ）　原（ハラッパ）

見つける（ミッケル）　乗せる（ノッケル）　負んで（オブッテ）　葉（ハッパ）　八分（ハッブン）　広い場（ヒロッパ）　江戸子（エドッコ）

以上のほかにも数限りないほどある。かように言葉の間にツをはさんで語気を強める習慣が福生と呼ぶ所をフッサと呼び慣わされたのではなかろうか。

フサという名称は何処から出たか。フサとはすはわち阜沙ということではなかろうか。阜とは土山とか陸とかの意であり、沙とは細かい砂のある川岸またはそれらの広い原という意である。故に阜沙といえば、川岸の砂の丘と解することができる。東は砂質の洪積層の低い丘陵が連なり、西には多摩の清流が帯を引いたように流れて、地形または地質の上からみても福生は阜沙の意味と解することができよう。このフサに当地方の慣習である。ツを添加してフッサと呼ぶに至ったものと信じている。